2024年12月1日　説教「罪人を招く主」

ルカの福音書5章27～32節

ルカの福音書の学び。先週に続き、5章から見ていきましょう。中風の男の罪を赦し、病をいやされた主の記事の続きです。

１．わたしについて来なさい（27～28節）

①レビという取税人（27）**「この後、イエスは出て行き、収税所にすわっているレビという取税人に目を留めて、『わたしについて来なさい』と言われた。」**

マルコの福音書をみると、場所はガリラヤ湖のほとりです。おそらくはカペナウムという町でしょう。ペテロのような漁師も多くいました。イエスはそこに出て行かれました。そこに一人の取税人が座っていました。取税人というのは、ローマ帝国の税金を取りたてる、下請収税吏（集金人）でした。この実務に当たるのは、ローマ政府から直接に権利を得たローマ人もいましたが、大方は征服された地の下請人がこれにあたりました。そんなことから、ここではユダヤ人が実務をしていたのです。登場するレビという取税人は、マタイの福音書を記したマタイです。イエスはこのマタイに目を留められました。同じ取税人であったザアカイが木の上に登った時に、イエスに目をとめていただいたことを想起させます（ルカ19章）。そして、そのレビにイエスはいきなり『わたしについて来なさい』と言われたのです。

②何もかも捨てて（28）**「するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った。」**

レビはその招きに応じました。「何もかも捨て」とありますが、場合によっては、取税人の立場を捨てる覚悟であったとも思われます。漁師であったペテロやヤコブやヨハネも、イエスの命令に従いました。しかし、彼らは直前に、大きな体験を与えられていました。つまり、不漁の日に言われるがまま、舟を深みに漕ぎ出し、網をおろしたところ大漁に恵まれるという出来事がありました。ところが、レビは何もなく即座に従っています。イエス・キリストの御人格に接して、何かを感じ、動かされて従ったのでしょう。

２．パリサイ人たちの批判（29～30節）

①レビの大ぶるまい（29）**「そこでレビは、自分の家でイエスのために大ぶるまいをしたが、取税人たちや、ほかの大ぜいの人たちが食卓に着いていた。」**

取税人はローマ政府に納金する以上のものを徴収し、それを諸経費に用いつつ、自分の懐にも入れていました。レビもその面では同じようにしていて、経済的に豊かであったようです。それは、この節に、大勢の人が食卓につけるほどの家を所有していたということからも想像できます。レビには、人々を招くだけの経済力もありました。大きな宴会ができるだけの働き人を確保していたようです。レビはそんなことから、イエスさまのために、多くの人々を集めて盛大な宴会を催しました。その食事に連なっている中には、取税人たちもいました。

②なぜ取税人や罪人と一緒に（30）**「すると、パリサイ人やその派の律法学者たちが、イエスの弟子たちに向かって、つぶやいて言った。『なぜ、あなたがたは、取税人や罪人といっしょに飲み食いするのですか。』」**

宴会の中にいたパリサイ人や律法学者たちがつぶやきました。『なぜ、あなたがたは、取税人や罪人といっしょに飲み食いするのですか』。マタイとマルコの福音書では、イエスがどうしてこのようにするかを、その弟子達に尋ねています。ここでは、弟子達にこの質問をぶつけるという設定です。ところで、この質問はある面には理由もありました。それは、取税人たちは一般の人々からも不正にお金を集金する悪い人達と思われていたからです。それなのに、そのような人々と一緒に食事をともにして、その罪を許容することは、とんでもないという疑問でした。

３．正しい人を招くためではなく（31～32 節）

①医者を必要する人（31）**「そこで、イエスは答えて言われた。『医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。』」**

イエスは弟子達への質問を察知されてお答えくださいました。それは、『医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。』という、ある面では当然の内容です。病んでいる人は、病に苦しみ、医者の所にかけつけます。人によっては、長い間苦しんだ後に、どうしようもなく病院の門をたたく場合もあるでしょう。一方、医者は病んでいる人を診察し、治療します。軽い病気もあれば、重病の場合もあるでしょう。しかし、客観的には軽い病気でも本人はとてもつらく思っている場合もあります。逆に重病の場合でも自覚症状は乏しく、医者にかかってそれが重大なものであることがわかる場合もあるでしょう。医者はそれらを見極めて、治療をするのです。確かに、病人にとって医者は大いなる助けなのです。

②罪人を招いて（32）**「『わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。』」**

イエスは、医者と病人のたとえを通して、霊的な問題を教えようとされたのです。つまり、イエスは霊的に病を持つ罪人をいやすために来られたことをお伝えくださっています。イエスが正しい人と言っているのは、正しいと思っている人と言い換えても良いでしょう。ここでは、パリサイ人や律法学者を直撃しています。イエスはそのような人を招くためではないと明言されています。そうではなくて、自分の罪に苦しみ悩んでいる人を招き、その人を悔い改めさせて救うために来られたのだと言われているのです。ここでは、レビ（マタイ）やその仲間たち、さらには世間からも罪人とされている人々こそ、霊的な医者が必要であることを語っておられるのです。「悔い改めさせるため」とありますが、結構強い言葉です。しかし、そうしなければ救いと平安に至らないからです。私たちも、悔改めていくときに、初めて十字架の主の贖いの深い意味がわかってくるのです。

《結論》今朝の聖書箇所において、第一に学びたいのは、パリサイ人のことです。彼らは、レビの招いた宴会に取税人や罪人たちがいて、彼らと一緒に食事をしている状態について、イエスがこれを受容していることを非難している点です。彼らにしてみれば、その場に罪人たちがいることは汚らわしいと感じたことでしょう。こうした事例は福音書に時折出てきます。10 月に学んだ箇所（18:9～14）では主イエスがこれをたとえ話で語ってくれています。パリサイ人と取税人が宮にやって来て祈ったという話です。その時に、パリサイ人は取税人に対して、『神よ。他の人々のようにゆする者、不正をする者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようでないことを感謝します』と祈っています。ここにパリサイ人の在り方の本質が示されています。自分は正しい人で取税人は罪人だと自信をもって語っています。イエスはパリサイ人の中にある高慢や内なる様々な罪を認めておられ、それに気が付かないでいるパリサイ人は自らの罪に気がつかず、高慢に振舞っていることを鋭く指摘しているのです。パリサイ人の在り方は私たちの中にも潜んでいることをまずは覚えましょう。

第二に、この聖書箇所では罪人は病人にたとえられています。イエスが取税人や罪人たちと共におられたのは、医者として彼らの病を癒さなければならないと考えられたからです。取税人を罪人として退ければ、霊的病は癒されなかったでしょう。とはいえ、私達も周りに「やくざの方」がいたとしたら、どうですか。距離を置くのではありませんか。自然、そのような対応になってしまうでしょう。進藤龍也さんという方がいます。53 歳とのことですが、元暴力団員でした。若い頃に何回も捕まって懲役刑を数回受けました。その人が差し入れられた聖書やミッションバラバ等の本を読み、キリスト教に興味を持つようになります。出所して鈴木牧師の導きを受けます。そして、次の御言葉で回心するのです。「あなたは彼らに言え、主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。イスラエルの家よ、あなたはどうして死んでよかろうか。」（エゼキエル書 33:11）。実を言うと、鈴木牧師も元は暴力団員。この進藤さんは、その後神学校で学び、今では牧師として教会などで用いられています。自他共に認める罪人（病人）に主イエス（医者）が癒して下さった例でしょう。

第三にイエスは自らを罪人と認める人を招き、悔改めを与え、赦しと救いを与えてくださる主だということです。先週は中風の男が、友人たちの信仰により、一方的に赦されたという記事を読みました。また 18 章のたとえ話での取税人は目を天に向けようともせずに、「神様、こんな罪人の私をあわれんでください」と祈りました。自分を義人とするパリサイ人ではなく、この取税人が義と認められて帰って行ったのです。

讃美歌 242 の 1 節「悩む者よ、われに来よと、恵みの主は招きたもう。重荷負いて、あえぐ友よ。主のみもとに、来たりいこえ」とあります。主は招いてくださっています。あなたがもし罪などに苦しみ、悩んでいるなら、自分で自分を裁かず、イエス様のところにいきましょう。主は招いてくださっています。